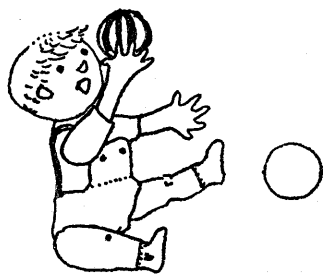


神賀忠吾氏の世界 (I)

江波 諄子



三年前の夏の暑い午後のことであった。私は、保育実習の見廻りのため、茨城県内のある保育園を訪問した。そこは海に近い場所であり、強い真昼の日差しの中、私は保育園の重い門を開いた。

いつものように、先生方に実習の御礼を申し上げてから、園内をみせていただいた。その時、私は園内の隅におかれていた木製の箱型のものに目を留めた。それは、どこの幼稚園や保育園を訪問してもみられるような業者

の規格品ではなかった。暖かく、素朴で、重みがあり、つくった人の愛情が一見して伝わってくるようなものだった。(図一参照)

私は思わず案内の先生に、「これは、どこのどなたがつくられたものか」と尋ねた。その先生はくっつくなく笑って、「これですか。水戸のカミガさんというおもしろいおじさんです。気が合うと、ただでも何でもすぐにつくって持ってきてくれるんです」というようなことを

おっしゃったように記憶している。私は、その保育園で、神賀さんの名前を詳しく聞いた。水戸市の上水戸という所にお住いということまで分った。

夏休みが終ったある秋の日、電話帳で調べて神賀さんの家に電話をかけてみた。ちょうどその日は、ミネルヴァ書房の方が取材にいらしていて、私は時間をずらしてお会いしに行ったと思う。木造の細長い工房の奥に、住家があり、初対面ではあったが、上がりこんで何時間もお話をしてきた。神賀さんは飾らぬ人柄であった。会うや否や、すぐに保育の本論に入ってしゃべり出した。形式的な挨拶に時間をかけるのは、私も好まないもので、初対面でも日頃考えている自分なりの保育の核心をすぐに話せる相手がいることは、実に愉快であった。

この時の話の内容は、今は詳しく覚えていないが、その日の私の神賀さんに対する印象は、（私は、世の中の宝物とよんでよいような方に出会った）ということである。保育系短大で十年目をむかえていた私にとって、書物より、大学より何よりも新鮮であり、真実であり、（こ

の方には、私に多くのことを教え、また気づかせてくれるだろう）ということでもあった。

神賀さんは、神賀勇次郎商会という名のもとで現在、創作遊具をつくっていらつしやる二代目ということになったかについても、過去の神賀家の歴史の中に、その必然性があるように思う。それは、ともかくとして、ここでは、私が特に親しく出会った神賀さんの遊具のいくつかについて、私の必然性から生まれた見方をご紹介してみたいと思う。

神賀さんの遊具に特定の固有名詞をつけることは本来無意味なことである。何故なら彼の遊具づくりの根本は、偉大なる哲学と知識と思考の結果の産物ではあっても、一度子どもの前に現われた時には、何も誇示せず、押しつけず、ただその存在のみが無言のうちに相手の子どもに語りかけ、子どもは自分なりの出会い方をしていけばよいからである。つまり与える大人が名前をつけたら、遊び方を説明する必要は全くないのである。名前を

つけないことも、説明をしないことも、その事だけはそう難しいことではないけれど、神賀さんには、自分のつくったおもちゃが自分の言葉でいい表わせない奥深い気持（人間愛）を伝えてくれる確信がある。それだけの努力をしていらっしゃるからである。そして、当然それには、出会う私達の感性をゆさぶるものがある。

但し、作品のいくつかのものには、便宜上やむを得ず名前がついているものもある。あるものに関しては、ここでも便宜上その名前を使わせていただくことにする。

一、箱型の台のようなもの

これは、最も安定した形においた時、高さが二十三センチメートルのもの（a）で、子ども一人の腰がおさまるような大きさのものである。平面と高さの組み合わせからみると、五通りの使い方ができる。この五種類の平面と高さを利用して、子ども達は、台や椅子や机に代表されるような使い方をする。

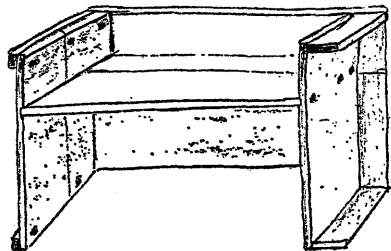
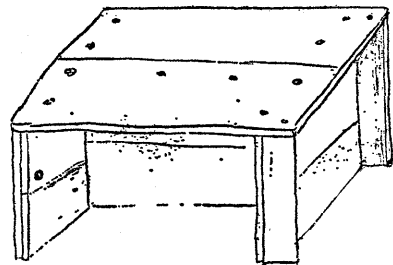
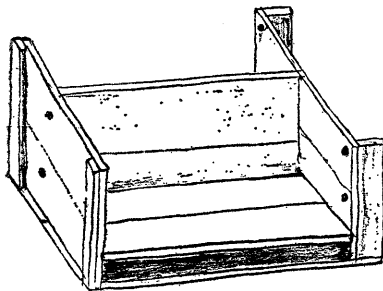


図 1

空間（四面あるいは五面が囲まれた）としてみると、やはり五つある。一番大きな空間には、子どもは自分の身（腰かけるように）をすっぽりとおさめて木に囲まれることを楽しむ。最も狭い空間（b）には、自分の大事な物を入れたり、足の指先をつっこんだりするのが好きなようである。

いずれの作品もそうであるが、すべて仕上げるまで手をかけているので、それぞれの木の角や、時には表面は自然な曲線を描いてやさしく削られて、ヤスリがかけられている。そしてねじ釘は、木の平面より深く埋めこまれているので、滅多に皮膚に触れることはない。

二、おし車

やや内側に傾いたし字形の遊具である。歩き始めの子どもがよく使う「カタカタ」という歩行器を思わせるが、いろいろな点で違いを見い出すことができる。まず第一に、このおし車は、いかなる体重をかけようとも、

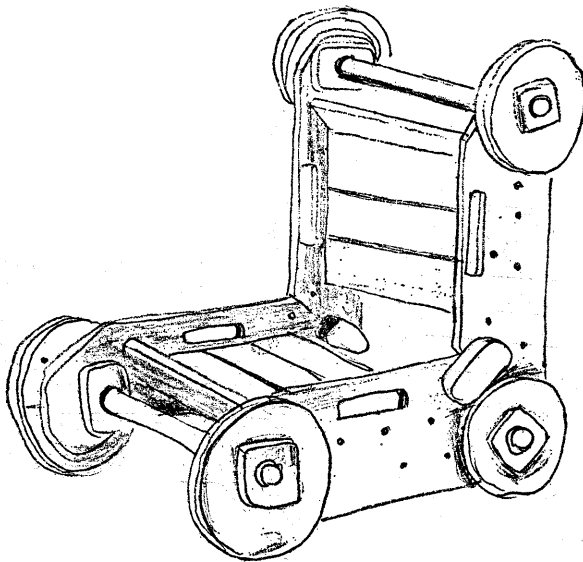


図 2

倒れたりすることは絶対にない。次に、コンクリートや、室内の平らな場所で押した時に、必要以上に前進してしまわないということである。考えてみると、これまでの押し車に、子どもを託す時の二つの大きな不安が解消されている。本体は、ずっしりと重いが、子どもが動かすのに重すぎるということはない。その上、方向転換がしやすいように、四つの車輪のうち、いずれか三点に力がかかるようになっていいる。さらに、それぞれの車輪は、手で別々に削られた二枚の円板が重ねられて出来ているので、たとえ人工の平面の床で動かしても、自然で快い震動が体に伝わってくる。神賀さんは、このように、乳幼児の体が自然の動きで揺さぶられることを、非常に重要に考えている。

私が観察した所によると、子どもは押す手の位置をいろいろにかえてみたりしながら、お気に入りの人形やおもちゃを乗せるのが好きなようである。私は、この押し車を病院で子どもに使わせていただいたが、医療器具としての無駄のない金属製の歩行器とくらべて、全くその製

作上の発想が異なり、奇妙な思いを経験した。前者は、子どもが今何をなすべきかを露骨に伝えてくる一方、後者は子ども自ら働きかけ行動をおこす中に、自ずと歩行訓練という結果が存在しているのだ。と同時に、近代的な病院の中に、神賀さんの押し車を置いてみることにより、近代医学がいかに科学的にとぎすまされてしまっているかを感じざるを得なかった。

この押し車は、逆さまにして、への字にするや否や、子どもは両手、両足をつかって、これに登り始める。はだしの指先は、しっかりと棒にしがみつき、緊張感がみなぎる。

三、ジャングルあそび本体

これは、幅六十八・五メートル、奥行六十八・五メートル、高さ百三十六・五メートルの立体の肋木のようなものである。

四面に平行に渡された棒は、すべてが異間隔で、同じ

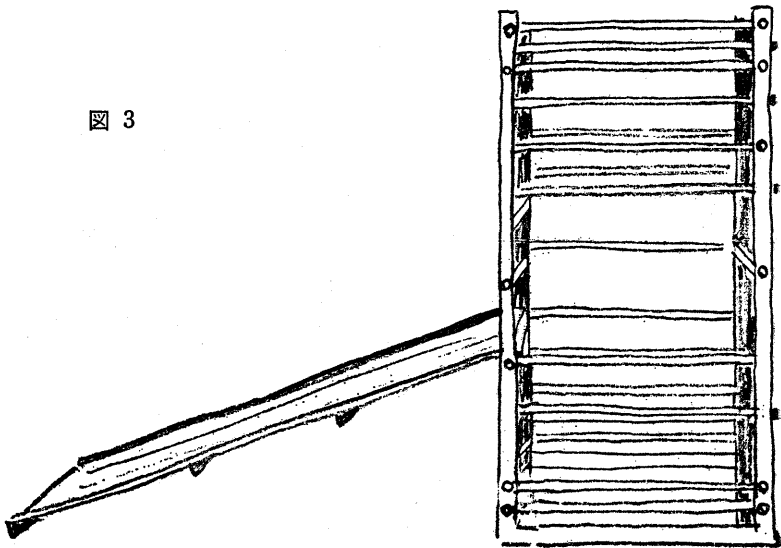
ものはみあたらない。ある所は、狭い間隔で、ある所は広く、またはその中間の間隔で棒が渡されている。棒は手でまろく仕上げてあるので、どこを握っても少しずつ感触が異なる。これに、とりはづしの出来る板（スベリ板）を加えて遊ぶこともできる。

さて、子供達は一体、どのような遊びを展開するだろうか。筆者が観察した限りで、ここに報告してみよう。

まず、立てて遊ぶ場合であるが、最も好まれるのが、下から上までよじ登ることである。すべての間隔が異なるので、子供はこの間隔を覚えるというのではなく、いつも登る時はチャレンジング（挑戦的）である。登りつめて、頂上でひと休みする時は、快いひとときである。時には、いずれかの棒に膝をまげてかけ、逆さまにぶら下ったりもする。

囲いの中に、ざぶとんを敷き、大事なおもちゃを運びこむのも好きなようだ。この時はとつぷりと腰を下ろし、一人または二人で小さな空間を楽しむ。上から毛布をかけて、屋根をつくって遊ぶこともある。

図 3



さて、本体を横に寝かすと、イメージはがらりと変わる。中はトンネルのようになり、子供は、這いながら、出たり入ったりする遊びに興ずる。それが一段落すると、上面に腰をかけ、足をぶらぶらさせる。しばらくすると、今度は、上面の棒の上を、素足で渡り始める。幼い子は両手もつかって、移動し、慣れてきたり、年長の子供では、軽々とこの丸木橋の上を立て渡ることが出来るようになる。ここでもやはり、棒の間隔がすべて異なるので、遊びの慣れによる飽きはなかなかやってこない。

(つづく)

(常磐学園短期大学)

